２０２３年度　入学試験問題

２月１日　第１回　午後

国　語（４５分）

注 意

１．はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
２．問題は２から11ページまでです。
３．解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
４．机の上にあるQRコードのシール（どれでも良い）を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
５．解答はすべて解答用紙に書いてください。
６．おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
７．句読点・記号も字数に数えます。
８．本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一　――1～10のカタカナの部分を漢字に直しなさい。
また、――11～15の読み方をひらがなで書きなさい。
つづけ字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

1　ホしいものはたくさんある。
2　胸にヒめた思い。
3　ゆったりとカマえる。
4　ハンごとに行動する。
5　サクバンに起きた事件。
6　水をチョゾウするタンク。
7　車庫をカイゾウする。
8　ドクソウ的な作品。
9　ヨクシュウまでに返事をください。
10　タイシュウに人気のある作家。
11　気が利く人。
12　片道切符を買う。
13　卵黄と卵白を分ける。
14　激痛に顔をゆがめる。
15　新作のドラマが絶賛された。

二　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

小さな雑貨屋さんのなかで、今まであるかなしかに聞こえていた音楽が変わった。

「あっ、サンバだわ！」

そのとたん私のからだがぴくっと動き、そのまま小さくゆれだした。いつもこうなる。サンバの音楽はどんな雑踏（＝人ごみ）のなかでも、またどんな小さな音でも、すぐ聞きつけて、からだのどこかが止めようもなく動き出す。

そもそも私は音好きの人間ではなかった。どちらかというと、耳より目のほうで、文字や形や、色の方に関心があった。若い頃、友達の多くはクラシック音楽好きで、そのころ流行していた音楽喫茶につられて行ったこともある。でもあの妙に静かで、むっつりした空気にはなかなかなじめなかった。そんな私が今ではサンバにⅠ目がない。

一九六〇年、ブラジルに着いてすぐ、私たちはサンパウロの小さな一部屋のアパートに落ち着いた。家賃が安いのが魅力だった。あとで知ったが、そこはⅡ名だたるアブナイ所で、普通の人はまず近づかないようなカイワイ（＝一帯。本来は界隈と書く）だった。

キキ（＝筆者の書いた物語『魔女の宅急便』の主人公）も偶然出会ったパン屋のおばさんにたすけられたように、私たちもとーい、とーい関係の友達の友達の好意で部屋を貸してもらうことができたのだった。

寝るところが決まったら、一日でも早く働き口を見つけなければならない。でもおバカなことに、私は外国なら、少しぐらいは英語が通じるだろうとⅢ高をくくっていた。それが全くの全く通じない。この国の言葉はポルトガル語なのだから、当然といえば当然なのに、なんでも自分中心に考える私は、なんと甘ったれだったのだろう。まわりを見回しても、たくさんいると聞いていた日本人の姿は見えない。日本人はある程度豊かな生活をしていたから、この地域には住んでいなかったのだ。

言葉が全く通じないということは、生活が成り立たないということだった。たとえば、肉を買いたいと思う。でも当時は肉屋には頭からおしりまでを半分に断ち割った牛の半身が天井からぶら下がっているだけだった。指さしたって、なにがもらえるのかわからない。部位の名前を言わなければ買えないのだ。もし幸運にもこっちの気持ちが通じたとしても、今度はどーんと肉のかたまりが目のまえに置かれる。鶏肉が食べたいと思ったら、羽を【Ａ】させている生

きた鶏を、買い物かごにいれて、持ち帰らなければならない。立ち飲みのコーヒー・バーで、昼間からお酒を飲んで、Ⅳたむろしている人を【 B 】しながらかきわけ、やっと手に入れられるのは、パンと牛乳とチョコレート。それをほそぼそとかじりながら、私は後悔のどん底にいた。

「くるんじゃなかった、こんなとこ。日本にかえりたい」

でも日本は地球の反対側、しかも送金は禁止されている国なのだ。二ヵ月の航海のあいだは、三食昼寝つきで、海のむこうを夢見てわくわくしていたのに、陸に足をつけたとたん 1 厳しい現実にのみこまれていた。それでも夫は職をもとめて、外にでかけていった。見かけによらず弱虫の私は窓を閉め切り、ベッドにもぐりこみ、パンをかじり、牛乳をすする日が続いた。それもやがて口にはいらなくなる。お金は【 C 】少なくなっていく。どうしようといったって、夫だってどうしようもない。「だいじょうぶだよ。なんとかなるさ」という言葉をかけてくれるのが精一杯だ。

ある日のこと、私は【 D 】とベッドから立ち上がり、ずっと閉め切っていた窓をなにげなくあけた。と同時にふーっと風が入ってきて、顔にあたった。街のざわめきも聞こえてきた。その瞬間私は 2 この国で生きていけるかもしれないと思った。とっても不思議な経験だった。たかが風のひとふきである。あのときの感じを私は一生忘れないだろうと思う。

なんであんな変化がおきたのだろう。私は何度も考えた。でも答えはない。助けてくれるものは必ずどこかにあるのだ。ありがたいことにそれをうけとる力も人は与えられているのだと思う。

変化はまず靴をはいて、外に出ることから始まった。このときの気持ちを、親元を離れ、魔女のテスト期間である一年間を、見知らぬ町、コリコでくらすことになったキキにも味わってもらいたいと思った。それで私はそっくりそのまま書くことにした。

「3 贈り物の箱をあけるときのように、わくわくするわ」と喜び勇んで、ふるさとを出てきたキキにとっても、現実はやっぱり厳しかった。飛べるんだから、なにかを早く運べる。そうだ宅急便屋をやろう。とてもいいことを思いついたと思ったのに、魔女に偏見をもっている町の人はなかなか受け入れてくれないばかりか、イジワルな噂を流す。

「たのんだ品物に魔法をかけられたり、なくなったりするらしいわよ」

待っても、待っても仕事の依頼はこない。友達もできない。こんなことでは魔女の存在を認めてもらうどころか、魔女の不思議は弱虫ってことになってしまう。キキは追いつめられどんどん自分のなかに閉じこもっていく。愛されて、すくすくと育った一人っ子キキは、こんなとき弱い。キキもなにげなく窓をあけてみる。すると外からやさしい春の風がふいてきて、からだに当たった。はっと顔をあげるキキの目に、とおくのアパートから手をふっている女の人が見える。その人が魔女の宅急便のお客さま第一号になってくれたのだ。そしてやっと新しい町でのキキとジジ（＝キキの相棒で言葉を話せる猫）の暮らしの扉が開きはじめる。

この部分は 4 都会に出てきて一人暮らしを始めた人や、外国で暮らしている人に共感していただいたようだった。「私も同じでした」とよく手紙に書いてくださる。窓をあける。たったそれだけのことが、その人の運命を変えることもある。人間は不思議だ。そうできていることがありがたい。これは私の実感だった。

私はサンパウロの町を歩きはじめた。仕事がなくても、明日が心配でも、外に出ることにした。やっと自分の足でこの国を歩いてみようと思うようになったのだ。

それから数日して、外出からもどった私がエレベーターに乗ろうとすると、うしろから飛びこんできた一人の少年がいた。おおきな茶色い目を元気に動かしながら、「セニョーラ（＝結婚した女性への

敬称)」と私によびかけ、エレベーターのボタンを指さした。「押してあげるよ。何階なの」と聞いているらしい。私は6のボタンを指さした。するとその子はとてもうれしそうに、自分を指さし、同じ6のボタンをつっついた。「同じ階に住んでいるんだよ」といっているらしい。見知らぬ私を気にしている様子はまったくない。飛びこんできた勢いのまま、からだははずむように動いていた。そのとき私の胸にぴーんとくるものがあった。

(5この子にこの国の言葉を教えてもらおう)

私の両手はいそがしく動き出した。ブラジルの国語はポルトガル語だから、まず自分を指さし、「ポルトゲース(ポルトガル語)」といい、おじぎをしながら、少年を指さして、幸運にも知っていた言葉、「ポル　ファボール(どうぞ)」を何度も繰り返した。少年は「わかった」とうなずいた。

その日の夕方、6少年はきちんとスーツを着て、バラの花を一本もってやってきた。

「プロフェソール・ルイジンニョ」と、紳士のように腰をかがめて、得意そうにいった。

(ぼくはルイジンニョ先生だよ)ということなのだった。そして私と彼とのポルトガル語のレッスンが始まった。

ルイジンニョは一人っ子で、両親といっしょに、一つおいたむこうの部屋に住んでいた。年は十二歳。イタリア系二世のおかあさんは、ルーチ・アマラルというサンバの歌手、ポルトガルとインディオ(=南米大陸の先住民)の混血のおとうさんは大道芸人だった。こういうととても華やかな人たちのように思えるが、私と同じアパートだから、売れている芸人とはとてもいえない。毎日家にいる。仕事に出かけるのを見かけることもほとんどなかった。というよりはルイジンニョの家はその日仕事にあぶれたミュージシャンたちのたまり場になっていたのだった。朝からそんな人たちが古ぼけた新聞紙の包みをかかえて三々五々(=あちらこちらから)やってくる。黒人もいれば、白人もいる。包みのなかには楽器ではない、でも楽器に変身するものが入っていた。お皿とフォークとか、お弁当箱と木のスプーン、それから履いている靴、驚いたことにマッチ箱一つなんていうのもあった。これがマラカスとタイコに変身する。箱を親指と小指にはさんで振ると、なかのマッチがしゃかしゃかと鳴る。同時にあとの三本の指でトカトカと箱をたたく。7おちびちゃんなのに、立派に楽器の役目を果たしていた。

ルイジンニョは8こんなサンバの音が毎日鳴り響くなかで生まれ育った子どもだった。いつも足は踊りモード、手はタイコモードになっている。その子が私の先生になったのだ!

「わはは、あんたがプロフェソールなのかい。お願いだから自分の学校の方を落第したりしないでよ。9ルイジンニョ先生」

あとになっておかあさんのルーチがわらってからかっていた。でも本人は大いにプライドをもって、先生になりきってくれた。

歌つき、踊りつきの10レッスンが始まった。単語はいつもリズムに乗って三回は繰り返される。

「アスーカ、アスーカ、アスーカ(さとう)」

歌うように、話すように、手を動かし、腰を動かし、足はステップをふんで。それにあわせて、私もまねして口を動かし、からだも動かす。憶えたと思っても、日がたって忘れてしまうと、「あれ……あれ……」とどこか一点を見つめて考えているうちに、教えてもらったときのまわりの様子などが、ぼーっと浮かんできて、からだも動き、思い出すことができた。頼りになるのはたいてい言葉の意味ではなくて、そのものの形や色、またそのときの風景なのだった。そんなとき、11言葉って面白いなって、つくづく思った。

身振り、手振りで説明しても、どうしてもわからないことに出会うと(実際そんなときの方がおおかったのだが……)、ルイジンニョ先生は私を町に連れ出し、実物を前にして教えてくれた。野菜や果物の名前、調味料、豆類、手に取って憶えるのだから、これはとて

も有効だった。しかも言葉の音を即席の歌にしたりして。もちろん買い方もいっしょに教えてもらえた。ふたりでそんなやりとりをしていると、まわりの人も割りこむようにして、なんじゃかんじゃと力をかしてくれる。でもいつの間にか彼の手のなかにはチョコレートなんかがこっそり入っていて、半分差し出して、私を共犯にした。

町に出て、こんなやりとりをしていると、12ブラジルの人は言葉に対して想像力がとても豊かなことに気がついた。たったの一言でも、この人は何を言おうとしているのかと、一生懸命考えてくれるし、また何か話しかけるときは、からだ全体を使って伝えようとしてくれる。共通のボディランゲージもある。一つでもわかりあえば、バンザーイでもしかねないほど喜んで、「もうブラジル人だね」といってくれた。移民で成り立っている国だから、言葉のできない人にはとてもやさしい。

少し言葉ができるようになり、やっとこの町が身近なものになりだすと、牛が半分になってぶら下がっているなんて、なんて面白いんだと思えるようになった。「コケッコウ」と鳴く鶏は、とうとうこの国をはなれる日まで買うことができなかったけど。でも生きている鶏のよし悪しを見るにはどうしたらいいかということは、学んだ。のどの肉をつまんでその弾力でみるのがいいらしい。ルイジンニョにレッスンを受けながら、私は日本人向け短波放送の営業の仕事を少しずつ始めていった。それはアメリカやカナダの農薬や肥料の会社に、浪花節や民謡の番組を買ってもらう仕事だった。夫は私より早く家具会社で設計の仕事を見つけていた。そして、少し余裕ができると、なにはさておき念願のブラジリアへでかけていった。

〈中略〉

このブラジリア旅行のほかは、リオにカーニバルを見にいった以外、本当に質素な暮らしを続け、よく働いた。そして二年後、ブラジルをはなれ、ヨーロッパ、カナダ、アメリカの旅をし、日本に帰国することができた。ブラジルでの暮らしは、なにものにも代えがたい貴重な二年間だった。なんのつながりもない国でも、人は信じ合えるし、それを受け入れようと心を開くことができれば、生きていけるという自信を持つことができた。それがいちばん嬉しいことだった。

近ごろのサッカーブームのおかげで、テレビなどをとおして、ブラジル語を聞く機会が多くなった。実況放送のブラジル語なんて、早口、巻き舌で、私の耳ではとても追いついてはいけないけど、聞いているだけで、13サッカーボールになった心地がする。ブラジル人はポルトガル語を話す。でもそのポルトガル語がブラジル風に変化しているので、もう「ブラジル語」と呼んでもよさそうだ。

何年か前、まだサッカー熱もさほどでなかった頃、日本とブラジルの試合をテレビで見ていたとき、もしかしたらブラジルに向けて放送しているかもしれないと思い、音声切換を押してみた。案の定、元気のいいブラジル語がとびだしてきた。百パーセント近くわからない。でも音をきいているだけで、サンパウロの通りのまんなかで、ルイジンニョとサンバのステップを踏んでいるような気分になれた。

すると、一人の選手がシュートして、ブラジルボールがゴールに向かってとびはじめた。それにあわせアナウンサーが「ゴーーーーー」と叫びはじめた。そしてボールがネットを揺らしたとたん「ーールッル」でしめくくり、「ビバ・ブラジル!!」と叫んだ。私もいっしょに手をあげ、「ーールッル」とまねしてふりきり、追いかけて「ビバ・ブラジル!!」と叫んだ。それでは一点入れられちゃった日本のアナウンサーはなんといっているかなとふっと思って、切り換えてみたら、アナウンサーは隣の解説者に、学者みたいな声でたずねていた。

「△△さん、今の蹴りをどう解釈なさいますか?」

すると解説者はとってもまじめな声で分析をはじめた。14私は思わず舌打ちした。「なにいってるんだよう、ゴールはゴールだよう」。せっかくこっちは全身ボールになりきってネットを揺らした気分で

いるのに。そんな理屈を聞いてどうするのよう！　フーリガン（＝熱狂のあまり騒動を起こすスポーツファン）になった心境だった。

点をとられて悔しがっている日本のファンの気持ちにもっと沿った言葉だってあるはずなのに。一点とられたのだから、日本のサッカーファンも感情的になっているはずだ。そんなときお勉強的コメントなんて聞きたいだろうか。もしそこに「そうだよ、そう!!」と人が強く共感する言葉があったら、人はそれぞれ喜びを感じ、自分流のサッカーの楽しみ方を見つけていくのではないだろうか。サッカー王国ブラジルにはサッカー言葉が豊富だし、楽しみ方にも年季がはいっているからかもしれないけど。喜びも、悔しさもそれぞれなのだから、せっかちに効果や結果を押しつけないでほしい。

日本のアナウンサーもこのごろはとても派手に叫ぶようになった。でも残念なことにいまいちリズムに乗りきってない。またタイコにあわせて、全員大合唱のような、日本の野球場の応援もどうかと思う。どうしてみんな同じ言葉で、同じ調子なの？　そして解釈まで押しつけられたいの？　なんだか無理矢理の感動みたいな気がする。そして「感動をありがとう」と、声をそろえていったりするのは、なんとも変だ。どうも15私たちの国は（　　）がすきみたい！答えが一つが好きみたい。これでは人に与えられている、一番大切な力、想像力の使いかたを忘れてしまうのではないだろうか。

言葉には意味と音がある。でも意味は時代によって変わりやすく、あまり信用がおけないと私は思っている。八月十五日、16敗戦の日、おおかたの言葉の意味は劇的に変わった。またベルリンの壁が崩れたときにも大きく変わったと思う。でも音やリズムは変わらない。そこからはそのときの風景が見えてくる。一人一人が自由に見られる風景が見えてくる。それはけっして押しつけがましくない。無理矢理がない。そういう言葉ってあるのではないだろうか。

日本とブラジルの放送合戦をききながら、言葉を使って、作品を作っている私はつくづく思った。紙の上に言葉を書くときは、からだ全体の中からわき出てくる言葉を信じて書きたい。効果や結果をせっかちに口にするのは簡単だけど、そこには貧弱な世界しか生まれてこないような気がする。もしそれに頼りたくなったら、物語はきっと面白くなくなってしまうだろう。自分にとって「これしきゃない言葉」を見つけることは大切だけど、それをこれしきゃないと人に押しつけてはいけない。無理矢理ではなく、17一人一人が心を遊ばせられる私の言葉がきっとあるはずだと思った。

サンバのリズムや、踊りの動きといっしょに、ルイジンニョが教えてくれた言葉には、ブラジルの濃い青い空や、赤い土、乾燥した風、街角のコーヒーのにおいや、路地裏の風景や、だれかが声高にだれかを呼ぶ声や、からだだけを動かして伝えようとする言葉や、それから、それから……みんな入っている言葉だったのだ。だからどんなに小さいサンバの音でも、懐かしさに私のからだは揺れ出し、心はワープして、ブラジルの街角に立って、そこでかわされているにぎやかな言葉を聞いている。

ある夏の夕暮れだった。私は深川の門前仲町のお不動さんの参道をあるいていた。下町生まれの父に似たお年寄りに会えるのがうれしくって、ときどきぶらりとここにでかけてくる。

突然どこからか子どもの泣きじゃくる声が聞こえてきた。夕暮れ時に子どもの泣き声はつきものだ。まるで一日の季語みたいだと思う。その声はだんだん近くなり大きくなってくる。どうやら横の小道から聞こえてくるらしい。のぞくと、若いおかあさんが泣いている子を抱き上げ、自転車の荷台にぼんと座らせているところだった。そうしながら大きな声でいった。「泣くの、やめなさい。あんた、江戸っ子だろ、江戸っ子！」私は思わず立ち止まり、くすっと笑ってしまった。その涙ベーベーの泣き虫坊主も、やがて大人になる。そしてどんな江戸っ子になるのだろう……。お隣の富岡八幡様の御神輿を担ぐのかな。それとも豆絞りのねじりはちまきなんか粋にまいち

やって、店屋のだんなになるのかな。今、歩いている町の風景と重ねて、私はこの子の何年かあとの江戸っ子ぶりをあれこれ想像した。そのとき私はもうこの世にいないかもしれない。でもこのおかあさんの言葉のやさしい表現から、この子のこれからの時間と、私とがつながっているような気がして、とてもうれしかった。

18 このおかあさんの言葉はすばらしい。あの子のなかにある宝が無限大に広がっていくような言い方だったと思う。この言葉を聞いた人はきっといろいろ想像するだろう。もし「やめなさい、泣き虫！　しょうがない子！」なんて決めつけるような言葉をいっていたら、そこで物語はもうおわりだ。当人はもとより、小耳にはさんだ人の楽しみまでうばってしまう。答えを一つにしない、一人一人が心に風景を描ける言葉、そういう包容力のある言葉と出会えたように思った。

泣き虫坊やでは、もう一つ思い出がある。

サンタクロースの取材でフィンランドに行ったときのことだった。待ち時間を空港の椅子に座って、ぼんやりとしていると、右手の方から子どもの泣き声が聞こえてきた。ものすごい泣き方だった。もはや痙攣の域に達している。迷子だと思った。すると反対の方から両手の大きな荷物をゆらしながら若い女の人が転がるように走ってくる。あっ、ママだ。そして私の目のまえで、荷物を置き、床に膝をつくと、子どもを抱きしめた。きつく、きつく。子どもの顔がママの肩ごしに私の方にむいている。安心したせいか、いっそう泣き声が大きくなった。ママはだまって抱きしめている。泣き声はしだいに静かになり、しゃくり上げるようになり、小さくなって、止まった。するとママはゆっくり立ち上がり、子どもの手を引き、荷物を持って歩き出した。七、八分、いや十分はあっただろうか……その間、この若いママは子どもを抱きしめ一言もしゃべらなかった。そこから見えてきた世界はあたたかく、大きかった。それは見事な沈黙だった。

「ママから離れちゃだめっていったでしょ。いうことをきかないからよ」

もしこんな一言があったら、この愛の場面はどこにでもあるただの出来事になってしまう。このママは一言もしゃべらなかった。

19 これはすごい言葉だと思った。

私はこの二人から目を離すことができなかった。

このごろは意味ばかりを重く見て、決めつけるような言葉が多い。また一方では決めつけられたいと思っている人もいるので、やっかいだけど、それではまわりの空気がだんだん貧弱になっていく。息ぐるしくなってしまう。

言葉ってもともと音だったのではないだろうかと思ったりする。

「ぽっ」なんて、生き物が音をだしたら、「おや、ぽっ、か」なんてつぶやきながら、聞いたものは、「ぽっ」っていう風景を心に描いたりして、……するとなんだかいい気持ちになって、じゃあまねしてみよう、「ぽっ」。すると、「ふーん、ぽっ、ねえ」という人がふえて、「ぽっ」「ぽっ」「ぽっ」と広がる。するとだれかが「おや、ぽっ、っていうと肩がかるくなるよ。いいもんだよ」。するとだんだん「ぽっ」は役に立つ言葉になっていく。やがて「ぽっ」っていいなさい、いわないと立派な大人にはなれませんよ、なんてことになりはじめ、ただの「ぽっ」がずいぶん勲章をつけた偉い「ぽっ」になってしまう。このごろは偉い「ぽっ」が多すぎる。私は肩がかるくなるぐらいの「ぽっ」がすきだ。大切な家族を思う魔女の心のなかにあった言葉はきっとこのぐらいの「ぽっ」だと思う。そういう言葉を使って、みんながそれぞれの感じ方で、気楽に遊べる物語を書きたいと私はいつも願っている。私の物語は、たぶん私が書いているのだけど、読む人ひとりひとりの物語になっていったら、嬉しい。それが最高！

（角野栄子『ファンタジーが生まれるとき』岩波書店より）

問1 ――Ⅰ～Ⅳの意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「目がない」　ア 関心がある　イ 関係がある　ウ 夢中である　エ 縁がない

Ⅱ「名だたる」　ア 本当に　イ 古くからの　ウ 最悪の　エ 有名な

Ⅲ「高をくくって」　ア 油断して　イ 期待して　ウ 予想して　エ 判断して

Ⅳ「たむろして」　ア ふらついて　イ 集まって　ウ 出入りして　エ さわいで

問2 【　】A～Dに次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。（同じ記号は一度しか使えません。）

ア どんどん　イ ばたばた　ウ ふらふら　エ どきどき

問3 ――1「厳しい現実」とありますが、具体的にどういうことですか。三十五字以上四十字以内で答えなさい。

問4 ――2「とっても不思議な経験」とありますが、

① どのような点が「不思議な経験」だったのですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

② このような経験が、人の生き方にどのような影響を与えると筆者は考えていますか。――2以降の本文から十五字でぬき出しなさい。

問5 ――3「贈り物の箱をあけるときのように、わくわくするわ」とありますが、これは『魔女の宅急便』の主人公、キキの気持ちです。『魔女の宅急便』のあらすじを説明した部分はどこまで続きますか。終わりの五字をぬき出しなさい。

問6 ――4「都会に出てきて一人暮らしを始めた人や、外国で暮らしている人に共感していただいた」とありますが、なぜこのような人々に共感されたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア よそ者として地元の人間に排除された経験を、同じようにしていたから。

イ 初めての町で、やることなすこと失敗ばかりの様子が描かれていたから。

ウ 見知らぬ場所で、いちから生活を作り上げていく点が共通していたから。

エ ひとりぼっちでも努力していれば、誰かが助けてくれると思えたから。

問7　――5「この子にこの国の言葉を教えてもらおう」と筆者が思ったのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　見知らぬ外国人である自分に対する警戒心がなく、積極的にコミュニケーションをとってきたから。

イ　子どもであれば、本当の先生に習う時のような授業料を払う必要がないだろうと思ったから。

ウ　同じ階に住んでいるようなので、教えてもらうのにどこかに出かける必要がなくて楽そうだから。

エ　とても人なつっこい少年で、自分が少しくらい失敗しても気づかないふりをしてくれそうだから。

問8　――6「少年はきちんとスーツを着て、バラの花を一本もってやってきた」とありますが、少年はなぜこのような格好で現れたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　憧れの日本人と知り合えて喜んでいるから。

イ　先生として失敗できないと緊張しているから。

ウ　子どもに教わるしかないことに同情しているから。

エ　先生として指名されてはりきっているから。

問9　――7「おちびちゃん」とは何のことですか。――7以前の本文からぬき出しなさい。

問10　――8「こんなサンバの音」とはどのような音のことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　さまざまな人種の人々が集まり、それぞれの出身地に合わせた個性を出し合って生まれた音。

イ　きちんとした楽器がなくともあり合わせの道具を使って生み出される、庶民の生活にもとづいた音。

ウ　貧しい中でも工夫して、本物の楽器以上に本格的なメロディを奏でるようにした道具で生み出した音。

エ　正統派のサンバではないが、大道芸人の父が積み上げた芸を応用して激しく陽気に仕立てた音。

問11　――9「ルイジンニョ先生」とありますが、この表現からは、母親のどのような気持ちが読みとれますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　勉強が嫌いな息子が先生を名乗るとは、信じられない。

イ　まだ幼い自分の息子が先生になるなんて、面白い。

ウ　わけのわからない日本人と関わりを持つのは、心配だ。

エ　息子よりも私のほうが、上手に言葉を教えられるのに。

問12　――10「レッスンが始まった」とありますが、ルイジンニョのレッスンについて説明した次の文章の［　　］1～3にあてはまる言葉を、――10以降の本文からそれぞれ指定の字数でぬき出して答えなさい。

1［三字］に合わせて何度も繰り返し声に出す。どうしてもわからない時は、実際に町へ出て学ぶ。さまざまな商品の2［二字］を見て、その単語を歌にしたりしながら、その商品の3［三字］まで教える。

問13 ――11「言葉って面白いなって、つくづく思った」とありますが、筆者はどういうところを面白いと考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 踊りが上手ではない自分でも、言葉で説明されながら学ぶことで、踊りと一緒に言葉を覚えることができたところ。

イ 言葉を学んでいたことで、そのときの風景や形や色など、教わったこと以上の物事を言葉で表現することができたところ。

ウ 今まで教わったことがない方法で言葉を身につけたので、自分も誰かに教えるときに試してみようと思えたところ。

エ 言葉を学んでいたはずなのに、その言葉の意味よりも先に、覚えた時の具体的な情景がぼんやりと思い浮かぶところ。

問14 ――12「ブラジルの人は言葉に対して想像力がとても豊かなことに気がついた」とありますが、なぜブラジルの人は「想像力がとても豊か」だと筆者は考えているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 移民で成り立っている国なので、言葉のできない人の短い一言からでも、その人の言いたいことを理解しようとしてくれるから。

イ 共通のボディランゲージによる理解をもとにして、相手が何を言おうとしているのか、論理的に予測することができるから。

ウ からだ全体を使って表現することが染みついているため、言葉を使わなくてもなんとなく理解できるような気がしているから。

エ 言葉では表現しきれない変わったものが町中にはあふれているので、人々は自然とそれが何なのかを想像するようになったから。

問15 ――13「サッカーボールになった心地」とはどういう感覚のことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア せまい日本を飛び出したような解放感。

イ 試合の行方を支配しているような優越感。

ウ ブラジル語の放送についていけない絶望感。

エ 実際にサッカー場にいるような臨場感。

問16 ――14「私は思わず舌打ちした」とありますが、この時の筆者の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア サッカーなんてどうせ遊びの延長なのに、なんであれこれ理屈をこねて日本を正当化しようとしてるの？

イ 今必要なのは理屈じゃなく「ゴールした！　された！」という感情に沿った言葉なのに、全然わかってない！

ウ 後でどんなに理屈をこねても「ゴールされた」事実は変わらないのに、なんだか潔くないんじゃないの？

エ 私が知りたいのはあなた自身がこのゴールにどれくらい感動したかであって、理屈なんかじゃない！

問17 ――15「私たちの国は（　　）がすきみたい！」の（　　）にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　細かいルール　　イ　あいそ笑い
ウ　みんないっしょ　　エ　確かな事実

問18 ――16「敗戦の日、おおかたの言葉の意味は劇的に変わった」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　敗戦という国をゆるがす大きなできごとを境に、人々の価値観が大きく変化したから。
イ　敗戦まで苦しい生活が続いたため、国の説明に対する信頼が大きくゆらいだから。
ウ　敗戦と共に敵国への偏見が消え、逆に豊かな国として憧れるようになったから。
エ　敗戦という現実に誰もが打ちのめされ、言葉だけの話を信じられなくなったから。

問19 ――17「一人一人が心を遊ばせられる私の言葉」とはどのような言葉ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　相手とのコミュニケーションのために必要であるということを一番に考えて、相手に投げかける言葉。
イ　音やリズムを大切にし、言葉の意味は時代によって変わるものだとしっかり認識した上で使う言葉。
ウ　これしかないという信念を持ちながらも、それを人に押しつけないよう、相手の気持ちによりそった言葉。
エ　言葉の意味ばかりを重く見ず、自ら想像力を働かせ、自分の中からわき出てくる思いを大切にした言葉。

問20 ――18「このおかあさんの言葉はすばらしい」とありますが、筆者はなぜそう思ったのですか。「だから。」に続くように、――18以降の本文から三十八字でぬき出し、はじめとおわりの五字で答えなさい。

問21 ――19「これはすごい言葉だと思った」とありますが、筆者がそう思った理由を次から選び、記号で答えなさい。

ア　言葉がなくとも、言うことを聞かなかった子どもを許すという思いが伝わってきたから。
イ　言葉で注意してはいないが、強く抱きしめることで子どもの反省をうながしていたから。
ウ　母親が一言もしゃべらずに、迷子になった自分の子どもへの愛情を表現していたから。
エ　何も言わない母親の態度から、子どもへの愛情をなくしていなかったことがわかったから。